

<最優秀賞>

## 資本主義社会におけるゲマインシャフトの 理論的分析

Theoretical analysis for “Gemeinschaft” in the Capitalist Society

経済学科 4 年 相沢 暁彦

### 【要旨】

コミュニティを崩壊させながら形成されてきたはずの資本主義社会において、コミュニティに対する近年の関心の高まりをどう理解すべきか？それが本研究の問題意識であった。この問題を解明するために、本論文では、コミュニティ論や市民と社会との関係を分析する際に多用される、ドイツの社会学者フェルディナンド・テンニースによって規定された社会類型論である「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」の理論を軸として、資本主義社会と「ゲマインシャフト」社会としてのコミュニティ概念との連関を、その有無も含めて理論分析を行うこととした。

まず、テンニースの「ゲマインシャフト」概念を検証しつつ、マルクスの「共同体」論との対比を行った。そのうえで、ゲマインシャフトがゲゼルシャフトに移行する契機について「生産関係」に重きをおいて考察した。テンニースとマルクスは、共に両社会類型間の移行の契機を市民社会の成立においている。市民社会では、自由と平等を獲得した個人（市民＝私人）が私的所有を前提とする自由な契約を基礎として、自由な商品交換を行うことが可能である。しかし、契約の自由を獲得するということは同時に階級分裂すなわち「不自由・不平等」を生じさせる。この「不自由・不平等」をもたらしたものは資本の価値増殖運動・資本蓄積であり、この運動の行き着く先は「疎外された労働」であった。

これらの分析をもとに、当初の課題であったゲゼルシャフト的社会である現代社会におけるゲマインシャフトとの関係について、「ゲゼルシャフト」的社会である現代の社会システムが「ゲマインシャフト」を希求する根拠を形成していることを明らかにした。すなわち、資本の価値増殖運動によって引き起こされる自由な個人による過度な競争を原因として「ゲゼルシャフト(個別性)」の人間からの疎外、また過度な競争による弊害の顕在化などの資本主義社会の存続が危機的状況に陥り、この事態に対する処方箋として「ゲマインシャフト的要素」である「共同性」が求められているのである。

## 【目次】

はじめに

### 第1章 ゲマインシャフトとは何か

- 1-1 有機体としてのゲマインシャフト的社会
- 1-2 テンニースとマルクスの「国家的共同体」の捉え方
- 1-3 テンニースとマルクスの社会把握の違い

### 第2章 ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行の動的把握

- 2-1 何を契機にゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ移行するのか
- 2-2 移行の契機としての「商品交換」
- 2-3 共同体的再生産(人間=自己)から市民社会的再生産(剰余=利潤)へ
  - 2-3-1 「労働力商品」によって実現される剰余価値
  - 2-3-2 資本蓄積を原因にして生じる、ゲゼルシャフトの下での「疎外された労働」
- 2-4 近代への移行に伴って生じる「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」の分離

### 第3章 資本主義社会におけるゲマインシャフト的要素の補填的役割

- 3-1 「コミュニティ=共同体」の不完全性とゲゼルシャフト(市民社会)の矛盾
- 3-2 理念としてのゲマインシャフト(共同性)とゲゼルシャフト(市民社会)との統一

おわりにかえて

参考文献

## はじめに

我々はあらゆる利害関係が存在する時代を生きている。しかも、それぞれが自由な個人として自由意志に基づき、自由に行動しているかのようにみえる。しかし実際には、その行動は、自分たちが暮らす社会、社会階層、歴史段階に規定されている。そして、今我々が暮らす社会を支配しているのは資本主義社会であり、そこでは社会システムを形作るものの中心が利潤の追求とそのための効率性に置かれている。

筆者は、この資本主義経済の求める「効率性」がもたらした弊害の一つが地域コミュニティの破壊であると考えてきた。このような地域コミュニティは、捨て去られ、忘れられていくものとなるはずであった。ところがその一方で、地域コミュニティへの関心が近年高まりを見せ始めた。効率性を求める現代資本主義社会において、非効率的だとして捨て去られたはずの地域コミュニティの存在が、なぜ再び注目されることになるのか、この疑問こそが本研究の入り口であった。

このような問題意識を持ちつつ近年のコミュニティ論に関する資料や文献に触れる過程で、その多くが、コミュニティ再生の手段としてコミュニティ内部の「協働」などの言葉を用い、コミュニティを取り巻くフレームワークである社会システムそのものを変革することへの論及よりも、むしろコミュニティ内部に問題解決の道を求めようとしていることがわかった。

一方、コミュニティ研究においてコミュニティの原型を議論する際によく名前が挙がるのがドイツの社会学者の F・テンニースであり、多くの論者が、彼の「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」という社会類型論を使っている。この「ゲマインシャフト」とは、例えば、テンニースと同じく社会の類型化を試みたアメリカの社会学者 R.M. マッキーバーにおいては「コミュニティ<sup>1</sup>」であり、同じくアメリカの社会学者 C.H. クーリーにおいては「第一次集団<sup>2</sup>」に該当する。ただし、テンニースは、「ゲマインシャフト」を有機的なものであり、そのもう一つの社会類型である「ゲゼルシャフト」へと変化し続けるものとして捉えている。彼はコミュニティ論にありがちな懐古主義的な観点に立って社会の類型化を行ったわけではない。この点が、現在の多くのコミュニティ論で展開されている「ゲマインシャフト」に対する捉え方との大きな違いである。

本論文では「なぜ、効率性を求める資本主義社会が非効率であるはずの地域コミュニティを希求するのか、その必然性は資本主義社会の中に存在しているのか否か」という問い

---

<sup>1</sup>マッキーバーのコミュニティ論における「コミュニティ」の定義は、村、町、国民社会のように人々が衣・食・住などの共通関心により結合した包括的共同体である。コミュニティ政策学会・研究フォーラム編集委員会『コミュニティ政策1』東信堂、2003 参照。

<sup>2</sup>クーリーの社会組織論での「第一次集団」の定義は「顔と顔とをつきあわせている親しい結びつきと、協力とによって特徴づけられる集団である」。C.H. クーリー『現代社会学大系 第4巻 社会組織論』大橋幸訳、青木書店、1970、24 ページ参照。また、他の社会集団のタイプの分類分けについて、詳しくは、清水幾太郎『社会学講義』岩波書店、1950 を参照。

に対する答えを求め、テンニースの主張を軸に、テンニース以前からテンニースにつながる理論を可能な限り取り入れつつ、テンニースの主張に対する検証を行いたい。その際、テンニースの「ゲゼルシャフト論」と併せてマルクスの理論を用いることで、資本主義経済(経済的土台)の考察および資本主義社会の構造把握を行い、「資本主義社会システムにおいて、なぜゲマインシャフト的要素への希求が起こっているのか」という疑問に対する答えを導き出すこととしたい。

まず第1章では、テンニース自身による「ゲマインシャフト」概念を把握することから始める。その際、マルクスとの対比をしながら「共同体(ゲマインシャフト)」あるいはその性格である「共同性」についても検証を加える。またテンニースのもう一つの社会類型である「ゲゼルシャフト」については第2章以降で詳しく考察を加えることとする。

当初は、筆者自身の地元が衰退していく姿を眼前にして政策提言の可能性を模索することから始まった研究であるが、多くの文献に当たっていくにつれて、自身の関心の方向性は、むしろコミュニティ再生に期待が高まってきた理由そのものを読み解くことへと向かうことになった。同時に、その過程でテンニースの理論に出会い、テンニースの理論形成に影響を与えたと考えられる先達の研究をたどっていくこと自体にも興味を惹かれた。従って、本論文では、実証研究ではなく、むしろテンニースの議論そのものの理解に多くの紙数を割いている。

## 第1章 ゲマインシャフトとは何か

テンニースの代表作である『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の邦訳は『共同社会と利益社会』である。しかし、本論文では「共同社会」と「利益社会」という言葉は用いず、前者を「共同体・共同体的社会」、後者を「近代以降の市民社会」と規定する。

### 1-1 有機体としてのゲマインシャフト的社会

テンニース自身が、序章にてヘーゲルを引用し、賞賛していることから、テンニースがヘーゲルやマルクスなどの理論を土台としていることは明らかである。マルクスとヘーゲル両者の共通点は、社会を捉えるにあたってまず「有機的」に社会を考察するという手法を用いていることにある。テンニースも同様にゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行を、有機的な変化として捉えようとしている。

テンニースは「ゲマインシャフト」について、「社会生活にとって明かに優れた意義を有している自然的な結合体<sup>3</sup>」と述べるとともに「ゲマインシャフトの理論は本来的あるいは

---

<sup>3</sup>Tönnies, F., *Community and Association (Gemeinschaft und Gesellschaft)*, London 1955 [邦訳 F・テンニース『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』杉之原寿一訳、岩波書店、1957、18 ページ]

は自然的状態としての人々の意志の完全な統一から始まる<sup>4</sup>」としている。すなわち「ゲマインシャフト」的では、自然発生的分業を基礎としながらも、互いに話し合い、助け合うために、人々の「意志の統一」が必要不可欠の要素となるのである。「ゲマインシャフト」的では「意志」を媒介として形成とするテンニースの指摘こそが、後述する「疎外」との関係で極めて重要である。

一方、マルクスは共同体の中にある人々について「われわれは歴史をさかのぼればさかのぼるほど、また個人は、それゆえまた生産する個人は、自立していないものとして、一つのいっそう大きい全体に属するものとして現れる<sup>5</sup>」と述べ、ゲマインシャフトにおける個人は常に全体に依存しているとした。このように個が集合し、お互いの存在を成り立たせているものを有機体と呼ぶのであるが、このように、個人が全体に依存している限り、そのような社会においては必然的に人と人との接触が生じ結合せざるを得ない。この意味で、マルクスのいうゲマインシャフトの下での人間関係は人格的依存関係にならざるを得ないのである。

また、マルクスは「共同体[Gemeinwesen]は現存の土台であるこの強制労働にもとづいている<sup>6</sup>」とし「奴隷制はやはり全生産の基礎だった<sup>7</sup>」と述べている。この「奴隷問題」についての考察は、テンニースの「第1篇第1章 ゲマインシャフトの理論」の分析において不足している点である。テンニースの分析には、封建的共同体における奴隷や、農奴制下で迫害を受ける「生きた人間」の生活という観点が欠如しているのである。マルクスは、奴隷的存在が被る迫害だけではなく共同体内で生じる不平等についても論を進め、「征服民族は、土地を征服者たちのあいだに分配し、こうして土地所有の一つの規定された配分と形態を押しつける。それゆえ、彼らは生産を規定するのである。あるいはまた、征服民族は征服民族を奴隷とし、こうして奴隷労働を生産の基礎にする<sup>8</sup>」と述べ、共同体の「不完全性」である共同体成員の「不自由」・「不平等」を指摘している。マルクスにとってのゲマインシャフトは、テンニースが述べているような平和的なものではないのである。

## 1-2 テンニースとマルクスの「国家的共同体」の捉え方

このように、マルクスは、ゲマインシャフトが決してテンニースの主張するような平和的な要素によって形成されているようなものではなく、その裏に奴隷的存在や不自由さや人権侵害が存在している共同体だったと理解していることが明確になった。

さらにテンニースとマルクスの違いがよくわかるのは「国家」についての分析である。

---

<sup>4</sup>同上、41 ページ

<sup>5</sup>マルクス『資本論草稿集①』大月書店、1981、26 ページ

<sup>6</sup>同上、281 ページ

<sup>7</sup>マルクス エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳、岩波書店、1956、28 ページ

<sup>8</sup>マルクス、前掲書『資本論草稿集①』44 ページ

テンニースによれば、彼自身の国家概念はゲゼルシャフトに該当する。テンニースは封建的形態を基礎とする都市国家を「都市」と表現し、そこでは「宗教の理念」が相互を結びつけているとした。そのような都市国家は「宗教的共同体」であり、この関係を成り立たせているものをテンニースは「従属者の幸福のために、あるいは従属者の意志に従って用いられ、従って従属者によって是認される優越せる力を、わたしは威厳 [Würde] また権威 [Autorität] と名づける。それには三種のもの、すなわち年齢の威厳、力の威厳、知識または精神の威厳の三つが区別されるだろう<sup>9</sup>」と定義するのである。

このようにゲマインシャフト的支配は、支配者の従属者(農奴)に対する「威厳」によって成り立ち、従属者は自分を超越する力をもつ支配者に対し「尊敬の念」で服従するという関係性を創りあげる。こうして、支配者と従属者の間には「尊敬の念」や「威厳 [Würde]」によって相互に共通した意志の統一をはかるという、先に見てきたようなゲマインシャフト的な関係が形成されるのである。

こうしてみると、テンニースの共同体とは、統治者が呪術や宗教により統制していた共同体であると考えられる。また、このように「力の威厳」・「知識の威厳<sup>10</sup>」によって主従関係が成り立つとしていることから、このゲマインシャフト的人間関係は「人格的依存関係」をそのシステムを維持する主軸に置きつつ成り立つ関係性に他ならない。

一方、マルクスはそれとは異なり宗教的な主従関係の把握に重点をおいていない。マルクスはヘーゲルの「国家が精神の自覚的な人倫的実現態として現に存在するようになるには、国家を権威および信仰の形式から区別することが必要である<sup>11</sup>」という箇所を引用して、宗教的国家を批判している。また、マルクスは国家について「国家はみずからを普遍性として確立するのである。完成された政治的国家は、その本質からいって、人間の類的生活であり、人間の物質的生活に対立している。この(物質的生活)利己的な生活のあらゆる前提は、国家の領域の外部に、市民社会のなかに、しかも市民社会の特性として存続している<sup>12</sup>」と規定し、国家とは市民社会と対立する関係にあると主張する。

### 1-3 テンニースとマルクスの社会把握の違い

ここまで、「ゲマインシャフト」あるいはゲマインシャフト的共同体に対するテンニースとマルクスのイメージの違いについて考察を加えてきた。テンニースには存在せずマルクスの社会に対する捉え方には存在しているものは、共同体を物質的な生産様式の違いか

<sup>9</sup>テンニース、前掲書、49 ページ

<sup>10</sup>テンニースは、僧侶について「知識の威厳は、特に僧侶の威厳として他のものから区別される」と述べており、僧侶は知識の威厳を持つ特別な存在であり、指導的な立場として尊敬の対象になるとしている。(同上、55 ページ)

<sup>11</sup>マルクス『ユダヤ人問題によせて ―ヘーゲル法哲学批判序説』城塚登訳、岩波書店、1974、23-24 ページ

<sup>12</sup>同上、24 ページ

ら考察した点にある。意志をベースに置いたテンニースの社会把握の仕方は、マルクスのような物質的考察による社会把握ほどの現実味がなく説得力に欠けるように思われる。一方、マルクスは「人間の意識がその存在を規定するのではなく、逆に、人間の社会がその意識を規定するのである<sup>13</sup>」として、テンニースの人間の意志(意識)が社会を規定するという把握とまったく逆の立場をとる。それはマルクスの生産関係と個との関係に対する次の理解からくるものである。「人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産関係を、とりむすぶ<sup>14</sup>」。

一方、テンニースは、ゲマインシャフト的な共同体が形成される過程は三段階にわたるとしている。第一段階では、血縁的繋がりを持った集団が形成されている。これをテンニースは「血のゲマインシャフト」と定義している。次の第二段階は「場所のゲマインシャフト」である。場所のゲマインシャフトとは、所謂「地縁」的つながりを持った共同体である。そして、第三段階では「精神のゲマインシャフト」が形成される。テンニースによれば、この「血のゲマインシャフト」と「場所のゲマインシャフト」との結合が「精神のゲマインシャフト」に昇華する。彼はそれを「真の人間的なゲマインシャフト」と位置づける。このように垂直的に形成される「ゲマインシャフト」において、人間と人間を結ぶ「意志」は、テンニースによれば「ゲマインシャフトに特有な意志としての相互に共通な心もち[Gesinnung]は、ここで了解[Verständnis=Consensus]と証せられるものである<sup>15</sup>」。つまりテンニースは、人間の意識あるいは「意志」が社会や人間の行動を規定するという観念論に立って社会をとらえているのである。テンニースが『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の第二版の序章においてヘーゲルを引用しているのは、実は、ヘーゲルが重視した「自由意志から出発する人倫の理念(国家)」という考え方に共感を抱いているからなのである。

一方、マルクスは現実的・物質的な面に重点を置き社会把握をおこなう。そのような人間の物質的社会、人間の存在・生活が人間の意識を規定するというマルクスの見方は、唯物論的解釈に基づくものである。

## 第2章 ゲマインシャフトからのゲゼルシャフトへの移行の動的把握

それでは、ゲマインシャフト的社会はいかにしてゲゼルシャフト的社会へ移行していくのだろうか。テンニースはマルクスの言葉を引用し「今日の社会も、固定的な結晶物ではなくて、変化しうる、かつ絶えず変化の過程にある一つの有機体である<sup>16</sup>」と述べ、社会

<sup>13</sup>マルクス『経済学批判』武田隆夫訳、岩波書店、1956、13ページ

<sup>14</sup>同上、13ページ

<sup>15</sup>テンニース、前掲書、58ページ

<sup>16</sup>同上、14ページ

集団や社会形態は現在も絶えず変化している有機体のひとつであることを明言する。それでは、その移行の原動力を両者はどのように解釈しているのだろうか。

## 2-1 何を契機にゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ移行するのか

テンニースは「家経済が一般的である段階から商業経済が一般的である段階への移行として現われ、またこれと密接に関連しているのが、農業の支配的な段階から工業の支配的な段階への移行として現れる<sup>17)</sup>」と述べ、社会変化と時を同じくして台頭してくる商人の利害関係を基準とする「商品交換」を通じてゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行がおこなわれるとする。テンニースによれば、交換という行為は、互いがその対象物を欲求するという意志からはじまるものであって、ここで商業における「意志」の重要性が指摘される。

ここでの「交換」とは商業的交換をさす<sup>18)</sup>。そして「交換がゲゼルシャフト的行為と考えられるかぎり、交換における一致せる意志は契約[Kontrakt]と名づけられる<sup>19)</sup>」。また、テンニースはゲゼルシャフト＝市民社会の下での自由な「契約」関係が成り立つ前提は農奴制の解体にあると考える。「道具や機械を所有して、交代しやすい自由な日傭労働者たちに土地を耕作させる自由な資本家的な領主があらわれ、最大の純益を得るために土地と労働を意識的に搾取するに至る<sup>20)</sup>」。すなわち、封建社会の解体によって資本家が土地や労働者からの自由な搾取を可能にするというのである。

一方、マルクスの方も近代化をブルジョア社会への移行と規定し、その移行を媒介するものは商品交換であり「物象的なもの」であると考えている。「共同体のとり形態が家父長制家族であろうと古代インドの共同体であろうとインカ国その他であろうと、同じことである。商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する時点で、始まる<sup>21)</sup>」。なお、このような商品交換の高度な発達には市民社会＝ゲゼルシャフトの形成によって実現されることになる。つまり、両者ともが、商品交換を市民社会の形成すなわちゲゼルシャフトへ移行の契機であるという認識を有しているというわけである。

しかし、マルクスにとっての商品交換は近代への媒介行為の一つに過ぎない。マルクスは、資本家階級と労働者階級の階級分裂により近代ブルジョア社会への移行が行われると考える。もちろん、この階級分裂も商品交換により実現される「物象的なもの(商品)」の

<sup>17)</sup>同上、116 ページ

<sup>18)</sup>テンニースはゲゼルシャフト的な商業の発展を三つの形態に区別するとしている。この際、テンニースはこの三つの形態の区分はマルクスのすぐれた分析であると述べている。テンニースは区分を①単純協働②マニュファクチュア③(本来的な大規模な)機械工業であるとしている。(同上、130 ページ参照)

<sup>19)</sup>同上、103 ページ

<sup>20)</sup>同上、137 ページ

<sup>21)</sup>マルクス『資本論(1)』大月書店、1972、161 ページ

発達によって生じたのである。ゲマインシャフトから市民社会へ移行することで、確かに人々は「自由・平等」を手に入れ自立する。このような市民社会での自由な個人とは、同時に「私人」・「市民」でもある。自由な個人としての市民(私人)は、契約を介しての自由な交渉が可能となる。そして、市民社会での自由な個人の特徴としての「個別性」が形成される。「家父長的な状態も、古代の状態も(同じく封建的な状態)も、商業、奢侈、貨幣、交換価値の発展とともに衰退するが、同時にまた、これらのものと歩みを同じくして近代社会が成長してくる<sup>22)</sup>」のである。

## 2-2 移行の契機としての「商品交換」

テンニースによると、ゲゼルシャフト的要素が現れる社会段階において人間関係を仲介するものは商品である。商品交換は後に特殊な商品である貨幣を生み出す。貨幣は商品の一般的等価を表し、「価値」あるいは「交換価値」として商品交換の価値尺度となる。この交換価値は商品の交換尺度になり、人と人は商品交換により互いに結び付き、「物と物との関係」＝「物象的な関係」を成立させるのである。

交換価値についてのテンニースの見解をみていこう。「すべての人がこの一つの意志をもたなければならない。交換の意志が普遍化され、すべての人が個々の交換価値に関与して、その行為を確認する。かくてこの個々の交換行為は、絶対的に公的なものとなる<sup>23)</sup>」。

テンニースは、交換価値を「意志の普遍化」と捉え、この普遍的性格を持つ交換価値を「物象化したもの」を商品・貨幣と理解している。テンニースは、貨幣についてマルクスを意識したと考えられるような記述を随所で残している。例えば、「貨幣という抽象物は、それを持たない人を刺戟して、それによって再び同様な勢力を外部に向かって行使したいという考えを胸にいだかせうる<sup>24)</sup>」とし、貨幣の呪物的性格について言及していることなどはその一例であろう。また「商人は、人為的な交換価値としての生活手段などで、自然的な交換価値すなわち貨幣の使用価値を買いとるのである<sup>25)</sup>」とし、貨幣(商品)の使用価値は、貨幣の交換価値を買いとることにあるとしている。マルクスと表現は異なるが、貨幣の使用価値＝交換価値は商品の交換尺度になるとの認識は共通している。このように物象的なものの「力」は、人々を市場に引き付け、相互を出会わせ、相互に依存させ合うのである。このような関係を物象的依存関係という。

以上の考察から、ゲマインシャフト的生産関係を「人格的連関に基づく共同体的生産関係」、ゲゼルシャフト的生産関係を「物象的生産関係に基づく私的生産関係」と規定することができよう。

<sup>22)</sup>マルクス、前掲書『資本論草稿集①』、138 ページ

<sup>23)</sup>テンニース、前掲書、95 ページ

<sup>24)</sup>同上、102 ページ

<sup>25)</sup>同上、147 ページ

## 2-3 共同体的再生産(人間＝自己)から市民社会的再生産(剰余＝利潤)へ

続いて、ゲマインシャフト的生産およびゲゼルシャフト的生産の性格付け、ならびにその移行の契機について、生産関係を軸に考察していこう。

まず、ゲマインシャフト的生産の下での生産の目的は何かをみていこう。ゲマインシャフト的生産は、テンニースによれば「共同労働」や「共同享楽」に基づいて行われている。この「共同労働」や「共同享楽」は、そのベースに「相互に共通な心もち[Gesinnung]」などのゲマインシャフト的要素を持つものであって、ここでのキーポイントは「共同性」という要素である。つまり、共同体内での成員の生産の目的(意志)は、同時に共同体自体の目的(意志の完全な統一)ともなっている。この共同体の生産目的は共同体自体の維持である。

一方、マルクスは共同体的生産の目的を「富の獲得ではなく、自活であり、共同体[Community]の一員としての自己自身の再生産、すなわち、一区画の土地の所有者[Proprietor]としての、そしてその資格において共同体[Commune]の一員としての、自己の再生産である、ということである<sup>26</sup>」としているのであるが、ここにテンニースとの共通性を見出すことができる。どちらの場合も、共同体内の個人は、自立した個人としてではなく「共同性」を基礎にして共同体での意志決定に従うことになる。つまり、そこでは、共同体の存続が共同体的生産の目的となるので、自己(個人)の目的(意志)も共同体の維持に向けられる。共同体の維持は、自己の自活あるいは自己の再生産に直結してくるからである。この点についても、マルクスとテンニースの間にはそれほど大きな差異を見出すことはできない。

一方、ゲゼルシャフトの現象形態ともいえるべき資本主義のもとでの自由な個人は、貨幣価格で表現される生活資源なしには生活を維持することができないため、唯一所持する商品である労働力を資本家に販売する賃金労働者となる。この時点で、すでに生産手段を持たない個人は、常に「物象的なもの＝商品」に縛り付けられる賃金労働者としての存在として措定されることとなる。そもそもゲゼルシャフト的社会とは、商品が主人公の社会である。言い換えれば「商品交換」が前提にある社会なのである。そこではあらゆるものが商品化され、人間の労働力も、労働力商品として労働市場で資本家と賃金労働者との間の交換(売買)対象となる。さらに資本家にとっての生産の目的は、交換を通じての利潤の創造であり利潤の蓄積である。こうしてゲゼルシャフト的社会での生産は、ゲマインシャフト的な生命の維持、種族の維持から「剰余価値生産」という目的へと移行することになる。

### 2-3-1 「労働力商品」によって実現される剰余価値

次に、「労働力」に対するテンニースとマルクスの考え方を比較しよう。このプロセスは、

<sup>26</sup>マルクス『資本論草稿集②』大月書店、1981、125-126 ページ

当然、「剰余価値生産」の概念規定の違いを理解することへとつながっていくものでもある。

テンニースは「我々は『質』を知っている。我々はそれを『価値』と名づける。しかし、ここではもはやこの『質』を『品質』と同一視してはならない<sup>27)</sup>」としており、商品の二重性である「使用価値」と「価値」とを分けて理解していたことがわかる。ここでテンニースは商品の「使用価値」を「品質」、商品の「価値」についても「質」とするなど、実はあいまいな表現を用いているのであるが、それでは、この商品の「質」とは何を基準に測られると彼は考えているのであろうか。

実は、テンニースは、商品の質(価値)が労働量(労働時間)により規定されるとし、労働の二重性を理解しているのであって、ここもマルクスと共通している。そのことは、テンニースが「商品に転化せる彼自身の支出した労働と同じだけの労働量の価値が帰属する<sup>28)</sup>」と述べている点からも明らかである。また、テンニースは商品の質(価値)を交換価値と理解すると同時に、質(価値)＝交換価値は、その商品の生産のために社会的に必要とされる平均労働時間によって規定されるとしている。この点もマルクスと共通している。

しかし、その一方で、テンニースは不払労働時間については触れていないのである。また、マルクスが明快に語った不払労働部分の価値が商品に移転するプロセスについても曖昧な理解にとどまっている。この不払労働部分の価値が商品に移転するプロセスを解明することは、テンニースのいう「資本家による労働者層の支配」を説明するためには避けて通れない議論のはずである。ところがテンニースは「労働があらゆる価値の源泉<sup>29)</sup>」と述べてはいるものの、それ以上の論述を展開していない。テンニースは、資本自身がまるで生き物のように価値増殖を行うプロセスを明確に示していない。これはテンニースの限界だと言わざるを得ない。このままでは、資本の生産過程と流通過程の連関についても説明がつかないことになる。それなのに、テンニースは資本家階級と労働者階級の対立を理解していながらも、資本の運動過程である  $G-W-G'$  という資本の姿態変化から規定される資本としての貨幣(商品)の生産過程と流通過程の相互連関については、何も明確に語っていないのである。

テンニースは、確かに「利潤または剰余価値とは、労働力の購入価格と、(その生産物の価格ではなく)生産物の中に含まれている労働力の交換価値の販売価格との差額<sup>30)</sup>」であるとし、資本家が労働力(A)を購入しその労働力(A)を生産手段(Pm)に結び付けることにより、労働力(A)の価値が商品(W)に移転すると理解している。彼はマルクスに依拠し「労働力の適用からの労働力の売却」をもって資本家による搾取を説明している。ちなみに、テンニースのいう「労働力の適用」は資本家による「労働力の消費」のことである。この過

<sup>27)</sup>テンニース、前掲書、96 ページ

<sup>28)</sup>同上、143 ページ

<sup>29)</sup>同上、テンニース、154 ページ

<sup>30)</sup>同上、テンニース、152 ページ

程は(資本としての)商品(W)の生産過程( $G-W(P_m \cdot A) \dots P$ )に当てはまる。「労働力の売却」は、不払労働部分の価値移転した商品( $W'$ )が市場にて売買される過程= $(G-W \dots P \dots W' - G')$ に当てはまる。

それでは「労働力」と「労働」との違いについてそれぞれテンニースとマルクスはどのように考えているのかをみていこう。この点は「疎外された個別性」あるいは「疎外された労働」の考察につながる非常に重要な箇所である。

テンニースは「労働が価値の源泉」だとし、剰余価値は「労働力の価格と労働力の交換価値の販売価格との差額」と説明している。

一方、マルクスは「労働力」を「われわれが労働力または労働能力と言うのは、人間の肉体すなわち生きている人格のうちに存在していて、彼がなんらかの種類の使用価値を生産するときそのつど運動させるところの、肉体的および精神的諸能力の総体のことである<sup>31)</sup>」と規定し、労働力の価値の中身については「労働力の価値は、労働力の所有者の維持のために必要な生活手段の価値である<sup>32)</sup>」としている。

ここで重要なことは、テンニースもマルクスも、物象的人間関係によって「労働力」が本来の人間の労働から離れ商品化されているという事実に着目しているという点である。ただし、テンニースがこの分析を持って「疎外」という概念まで行き着いたどうかは疑問である。本来の人間労働は、マルクスによれば、人間自身の目的(欲望)に対して自身の肉体にそなわる手や足、頭を動かす活動のことである。しかし賃労働者はこのような自身の欲望をもって労働するのではなく、賃金労働者として資本家の「剰余価値生産」という目的のために自身を「労働力商品」として資本家に販売し、資本家のために労働を行うことになる。このことこそが「疎外された労働」なのである。

### 2-3-2 資本蓄積を原因にして生じる、ゲゼルシャフトの下での「疎外された労働」

マルクスは、資本主義的生産そのものについてテンニースよりもさらに進んだ考察をおこなっている。それは資本の価値増殖欲求による資本の蓄積が原因で生じる市民社会の下での「自由な資本家(私人)」と「自由な労働者(私人)」への階級分裂の過程が生み出す「自由な個人」の「疎外」についての考察である。これは市民社会の成立によって人々が表象的な自由・平等を獲得した結果生じた不平等であり、自由な個人からの「個別性」の分離・疎外でもある。この「疎外」は、資本家による労働力商品を含めた資本の私的所有の結果として生み出されるのである。

この点について、マルクスは「資本主義的生産・蓄積の機構は、この数を絶えずこの価値増殖欲求に適合されているのである。この適合の最初の言葉は、相対的過剰人口または

<sup>31)</sup>マルクス、前掲書『資本論(1)』294 ページ

<sup>32)</sup>同上、300 ページ

産業予備軍の創出であり、最後の言葉は、現役労働者軍のますます増大する層の貧困と受給貧民の死重とである<sup>33</sup>」と述べ、資本による価値増殖欲求による「資本の蓄積」がもたらす様々な弊害について次のように指摘している。例えば、16世紀頃にイギリスの貧困問題について、マルクスは、資本主義的生産の下で生産性が高まるにつれ資本家の富は増大するが、それは労働者による犠牲によって可能になると説明している。「資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、彼の受ける支払いがどうであろうと、高かろうと安かろうと、悪化せざるを得ないということになる<sup>34</sup>」。

一方、テンニースは資本の価値増殖欲求や資本の蓄積については述べていないが、「貨幣を集めることが商人の目指している唯一の事柄なのである<sup>35</sup>」としている。マルクスは資本家の支配構造の本質は「資本家ではなく資本」による資本自身の蓄積運動と理解しているが、テンニースは「資本ではなく資本家」の側に重きを置いている。この点も解釈上の大きな違いである。もちろん、資本蓄積を目指す運動こそがゲゼルシャフトの下での資本家による労働者の支配構造の本質である。この最も重要な点をテンニースは理解していないのであって、彼はマルクスの理論を自身の理論の土台としているにもかかわらず、マルクスの根幹にある「資本の蓄積」についての立ち入った考察にたどりついていないのである。

現実を見ても、明治政府の下で行われた殖産興業政策は紡績業で働く女性労働者の劣悪な労働状況を作り出した。「リング紡績機の導入によって女性若年労働者への依存度が高まり、20歳未満の出稼ぎ女工が過半をしめ、寄宿舎制度が一般化した。紡績女工の労働時間は11時間ないし11時間半に及び、過酷な労働条件のもとで昼夜2交替制の労働に従事していた<sup>36</sup>」のである。

また、日本で高度経済成長を可能にした社会的生産諸力の高度化の陰で、長時間通勤、過疎と過密、公害の発生がみられたことも記憶に新しい。また、グローバリゼーションの下で生じる賃金の切り下げや地球規模での環境破壊、過労死なども同じことである<sup>37</sup>。

#### 2-4 近代への移行に伴って生じる「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」の分離

この資本主義において「ゲマインシャフト(共同性)」と「ゲゼルシャフト(市民社会)」は分離することとなる。

<sup>33</sup>マルクス『資本論(3)』大月書店、1972、240ページ

<sup>34</sup>同上、241ページ

<sup>35</sup>テンニース、前掲書、124ページ

<sup>36</sup>老川慶喜『日本経済史』税務経理協会、2002、117ページ

<sup>37</sup>「生産は人間を、一つの人間商品、商品という規定における人間として生産するばかりでなく、この規定に対応して、生産は人間を、精神的にも肉体的にも非人間化された存在として生産する。——労働者や資本家の不道德、不具、奴隷主義[Helotismus]——その生産物は自己意識をもったまた自己活動的な商品である。」(マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳、岩波書店、1964、109ページ)

マルクスは、近代化への過程は、元来一体のものが分離する過程すなわち「疎外」が拡大していく過程であるとしてこの「疎外」の拡大が「無関心」「無頓着」といった近代ブルジョア社会の特徴となって現れるとしている。マルクスは、自由な個人は「互いに無関心な諸個人の相互的で全面的な依存性が、彼らの社会的連関を形成する<sup>38</sup>」としている。一方、テンニースも、ゲゼルシャフトの下での人々は「あらゆる結合にもかかわらず依然として分離しつづける。(中略)活動が個人によってなされるかぎり、その個人に内在する統一の意志や精神を表現するような活動や、その個人自身よりも彼と結合している人々のためになるような活動は行われぬ。それどころかここでは、人々はそれぞれ一人ぼっちであって、自分以外のすべての人々にたいしては緊張状態にある<sup>39</sup>」とし、マルクス同様、ゲゼルシャフト的社会では疎外が発生するとしている。マルクスは「疎外」について次のように語る。「活動の社会的性格は、生産物の社会的形態と同じように、生産への個人の参加分と同じように、ここでは諸個人に対立して疎遠なもの、物象的なものとして現れる。それは、諸個人の相互的な関係行為としてではなく、諸個人に依存することなく存立し、無関心な諸個人の相互的衝突から生じるような諸関係のもとへ諸個人を服属させることとして現れる。各個々の個人にとって生活条件になってしまっているところの、諸活動と諸生産物との一般的な交換、つまり一つの物象として現れる。『人格と人格』との社会的関連は『物象と物象』との一つの社会的関係行為に転化しており、人格的な力能は物象的な力能に転化している<sup>40</sup>」ここでマルクスはゲマインシャフトを「人格的な力能」とし、ゲゼルシャフトについては「物象的な力能」と規定するのである。

一方、前述したように、テンニースは意志論を基にして「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」の概念規定を行っている。この「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」の両者が統一されていくことの意味について、有井氏はテンニースが影響を受けたヘーゲルの考え方を挙げながら次のように述べている。

そもそも、ヘーゲルが示し、マルクスがさらに肉付けを行った疎外から解放された人間性が開花されるような社会とは「ヘーゲルの国家、内容的に現代ブルジョア社会の対立的なあり方に制約されながら、理論上は諸個人(市民社会)と諸個人の対象化された Gemeinwesen(政治的国家)との和解、概念的統一であり、完成された社会システムである<sup>41</sup>」。有井氏によれば、ゲマインシャフト的な形態は「政治的国家」であり、ゲゼルシャフト的な形態は「市民社会」のことを示す。この政治的国家(ゲマインシャフト)と市民社会(ゲゼルシャフト)とが分裂した状態こそが現在の資本主義社会システムであり、この疎外されたゲマインシャフトとゲゼルシャフトの統一こそが完成された社会システムであるというので

<sup>38</sup>マルクス、前掲書『資本論草稿集①』136 ページ

<sup>39</sup>テンニース、前掲書、91-92 ページ

<sup>40</sup>マルクス、前掲書『資本論草稿集①』143 ページ

<sup>41</sup>有井行夫『株式会社の正当性と所有理論』青木書店、1991、214 ページ

ある。この視点に立って見ると、テンニースの「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」とは、「ゲマインシャフト(政治的国家)が包含する共同性」と「ゲゼルシャフト(市民社会)が包含する個別性」という対立する両者の「疎外」の理念化を試みたものにすぎない<sup>42</sup>。ここに、テンニースの限界がある。

### 第3章 資本主義社会におけるゲマインシャフト的要素の補填的役割

#### 3-1 「コミュニティ=共同体」の不完全性とゲゼルシャフト(市民社会)の矛盾

疎外は、現代社会においても、生存権の侵害や自己否定という形をとりつつ継続していく。ここまでみてきたように、資本主義社会とは「ゲマインシャフト(政治的国家)」と「市民社会=ゲゼルシャフト(個別性)が分離させられている社会システムである。しかし、そのままでは、絶望や労働意欲の低下といった弊害が生じることになる。また、資本が生態系を破壊しながらたゆまない資本蓄積を続けることで、再生が不可能なほどの環境破壊が進めば、資本生産を継続するための原料の調達さえままならない。この資本主義社会(全体)が持続不可能な状態に追い込まれるなかで希求されるものが「ゲマインシャフト的要素(共同性)」であり、「相互に共通な心もち[Gesinnung]=了解[Verständnis=Consensus]」である。有限である自然資源を次世代まで維持するためのコモンズ論やコミュニティ論の多くの著書に「ゲマインシャフト的要素=共同性」を見出すことが出来ることはその証左である。

そもそもゲマインシャフトがゲゼルシャフトから分離される資本の必然的な動きに目を向けなければ、本来のゲマインシャフトや「共同体(=Community)が不完全な社会形態であることも理解されない。現代のコミュニティ論の多くが「コミュニティ=共同体」の意味や歴史的構造把握を前提としていないように思われるのはそのためである。

これまで見てきたように、「コミュニティ(Community)」という言葉が一人歩きをすることは危険なことである。ゲマインシャフトは、それ単体で存在するのであれば、その社会関係は極めて閉鎖的なものだからである。その一方で、地域社会を崩壊から救い出そうとするとき、我々は「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」の分離・疎外をもたらしている「資本主義社会システム(全体)と資本主義経済(土台)」の見直しこそが必要な時代を迎えているのかもしれない。それは、同時に「ゲゼルシャフト(市民社会)」を見直すことにもつながるものである。

ゲゼルシャフトの特徴としての「個別性」は、生存権の侵害などの「被害を受ける側(労働者など)」と、個々人間の過度な競争がもたらす弊害など「被害を与える立場(資本家)」という自己矛盾を内包する。この矛盾は、平等を保障されているにも関わらず「物象的な

<sup>42</sup>同上、第三章「資本の形態と所有の経験」を参照されたい。

もの」によって不平等が生じるという市民社会が抱える本来的な矛盾である。そして「個別性」のこのような自己矛盾も、資本主義的生産様式による資本の蓄積によるものなのである。そうだとすれば、ゲマインシャフトの側面をのみ取り出して再生を図ることは、ゲゼルシャフトが有する矛盾から視点を遠ざけ、全体像を把握することを不可能にしてしまうことにならないだろうか。そもそも二者は一對のものであるからである。

### 3-2 理念としてのゲマインシャフト(共同性)とゲゼルシャフト(市民社会)との統一

成長しすぎた資本主義社会では、もともと一つに統一されるはずの「共同性」と「個別性」が対立関係におかれる。この社会システムの下では、「資本による価値増殖運動」がゲマインシャフト的な「共同性」の疎外をもたらしと同時に、ゲゼルシャフト的な「個別性」の疎外をもたらし。例えば、疎外されたゲマインシャフトの例として「地球環境問題」があげられよう。地球環境あるいは地球の自然資源は地球上の全生命の共通の財産である。この「共通の財産」は資本の増殖運動により今や奪いつくされようとしているのが現状である。地域社会の崩壊・衰退も同じ原理である。

そして現在、「地球環境問題」は、取り組みの強弱があるにせよ、国境を超えた共通認識となりつつある。この社会全体の意識の変化をテンニースの言葉で表現するならば、それは「意志の完全な統一」である。このような社会意識の変化の根本には「ゲマインシャフト(共同性)」と「ゲゼルシャフト(個別性)」との統一を再びはかりたいとする市民社会における期待があると考えられる。

社会環境と人間の意識の関係性についてマルクスは次のように述べている。「人間の意識がその存在を規定するのではなく、逆に、人間の社会がその意識を規定するのである<sup>43</sup>」。

なぜ、資本主義社会はゲマインシャフト的要素を希求するのか？その答えは以下のとおりである。資本蓄積によって引き起こされる過度な競争は「ゲゼルシャフト(個別性)」を人間から引き離す、いわゆる疎外を引き起こす。また過度な競争が自然資源、人的資源、地球環境の崩壊を顕在化させる。それはこれらの資源を利用しなければ維持できないはずの資本主義社会にとっては存続の危機となる。

従って、資本主義社会システムが抱える病気に対する処方箋として「ゲマインシャフト的要素(相互に共通な心もち[Gesinnung]=了解[Verständnis=Consensus])」としての「共同性」が求められているという結論に至るのである。(過度な資本主義の否定)そして、「ゲマインシャフト=共同性(政治的国家)」と「ゲゼルシャフト=個別性(市民社会)」の統一であり、それが成し遂げられた社会こそ、真に豊かな社会であり、「自由」・「平等」・「独立」を誇る理念としての市民社会像である<sup>44</sup>。

<sup>43</sup>マルクス、前掲書『経済学批判』、13 ページ

<sup>44</sup>この両者の統一の実現は、マルクスとヘーゲルの根本的理念である。そしてこの理念は、テンニース

## おわりにかえて

当初より、コミュニティ論への批判の糸口としてゲマインシャフト論を論じるには抵抗があった。その理由は、筆者のテンニースとマルクスの理論の理解や知識の浅さであり、逆にテンニースの議論の奥深さに気がついたことにある。テンニースは数々の先達の議論を土台としている。例えば、ホッブズ、ヘーゲル、カント、ギールケ<sup>45</sup>をはじめ、数え切れないほどの人名が挙げられる。「テンニースが理解していたはずの先達の文献のほとんどに当たることなく、彼の社会類型論を軽く論じるべきではない」という葛藤が常に頭の中にあっただけでなく、また幼い頃から農村で育ち、平和的な農村の現実を経験しているため、テンニースの「平和的なゲマインシャフト論」の完全な批判に立ち入るにあたり、多少の葛藤があったのは事実である。

だからこそ、さらに多くの原典を読破したうえで、再度この命題に挑戦し直したいと考えている。

## <参考文献>

- ・ 有井行夫『株式会社の正当性と所有理論』青木書店、1991
- ・ 有井行夫『マルクスの社会システム理論』有斐閣、1987
- ・ アリストテレス『ニコマコス倫理学』高田三郎訳、岩波書店、1971
- ・ 安閑吉男『世界思想教養全集 19 ドイツの社会思想』河出書房新社、1980
- ・ 阿部弘『労働と所有』八千代出版、1983
- ・ 足立正恒『唯物論と弁証法』新日本出版社、1984
- ・ アマルティア・セン『人間の安全保障』東郷えりか訳、集英社、2006
- ・ 石田文次郎『オットー・ギールケ』三省堂、1935
- ・ 上野千鶴子『家父長制と資本制 マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店、1990
- ・ 宇沢弘文『社会的共通資本』岩波書店、2000
- ・ 内橋克人『共生の大地 新しい経済がはじまる』岩波書店、1995
- ・ E・J・ホブズボーム『共同体の経済構造 マルクス『資本制生産に先行する諸形態』の研究序説』市川康治朗訳、未来社、1969

---

にもあるとおもわれる。テンニースは、ヘーゲルの哲学を次のように引用している。「客観的精神は、自由意志から出発して、その抽象的対象を法の中に定立し、人倫にまで高められる、そして人倫の理念は、国家において実現される」しかし、このことからテンニース自身が「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」の統一を目指していたのかは判断し難い。ちなみにテンニースは「ゲゼルシャフト」の延長線上に「ゲノッセンシャフト(協働組合社会)」が位置していると、後付している。詳しくは前掲書『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』(1957)の第二版の序章と、テンニース『同(下)』の附言(1912年および1922年)、135-137ページを参照されたい。

<sup>45</sup> 清水幾太郎氏によれば、テンニースの「ゲマインシャフト論」はギールケから影響されていると述べている。(詳細は以下の文献を参照。(清水幾太郎、前掲書))

- ・ 大塚久雄『近代資本主義の系譜』学生書房、1950
- ・ 大塚久雄『社会科学の方法』岩波書店、1966
- ・ 大塚久雄『大塚久雄著作集 第七巻 共同体の基礎理論』岩波書店、1969
- ・ 大沢真理『イギリス社会政策史』東京大学出版会、1986
- ・ 大谷禎之介『図解 社会経済学』桜井書店、2001
- ・ 大江正章『地域の力』岩波書店、2008
- ・ 経済学辞典編集委員会『大月経済学辞典』大月書店、1979
- ・ 金子ハルオ『資本主義の原理と歴史』青木書店、1979
- ・ K・マルクス『資本論草稿集①』大月書店、1981
- ・ K・マルクス『資本論草稿集②』大月書店、1981
- ・ K・マルクス『資本論(1)(3)(4)』岡崎次郎訳、大月書店、1972
- ・ K・マルクス『賃労働と資本』長谷部文雄訳、大月書店、1935
- ・ K・マルクス『賃銀・価格および利潤』長谷部文雄訳、岩波書店、1935
- ・ K・マルクス『哲学の貧困』山村嵩訳、岩波書店、1950
- ・ K・マルクス『経済学・哲学草稿』城塚 登、・田中 吉六訳、岩波書店、1964
- ・ K・マルクス『ユダヤ人問題によせて ―ヘーゲル法哲学批判序説』城塚登訳、岩波書店、1974
- ・ K・マルクス『経済学批判』武田隆夫訳、岩波書店、1956
- ・ K・マルクス/F・エンゲルス『共産党宣言』大内兵衛・向坂逸郎訳、岩波書店、1951
- ・ K・マルクス/F・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』廣松渉・小林昌人訳、岩波書店、2002
- ・ K・マルクス/F・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳、岩波書店、1956
- ・ カント『永遠平和のために/啓蒙とは何か 他3編』中山元訳、光文社、2006
- ・ G.エスピン-アンデルセン『福祉国家の可能性 改革の戦略と理論的基礎』渡辺雅男・渡辺景子訳、桜井書店、2001
- ・ G.W.F.ヘーゲル『哲学史序論 哲学と哲学史』武市健人訳、岩波書店、1967
- ・ G.W.F.ヘーゲル『歴史哲学講義(上)』長谷川宏訳、岩波書店、1994
- ・ コミュニティ政策学会・研究フォーラム編集委員会『コミュニティ政策1』東信堂、2003
- ・ 清水幾太郎『社会学講義』岩波書店、1950、
- ・ 清水幾太郎編『世界の名著 36 コント スペンサー』中央公論社、1967
- ・ 新明正道『ゲマインシャフト』恒星社厚生閣、1970
- ・ ショーペンハウエル『知性について』細谷貞雄訳、岩波書店、1961
- ・ ショーペンハウエル『自殺について』斉藤信治訳、岩波書店、1952

- ・ ジョン・スコット『階級論の現在』渡辺雅男訳、青木書店、1998
- ・ J・ローゼンバーグ『市民社会の帝国』渡辺雅男・渡辺景子訳、桜井書店、2008
- ・ 高島善哉『市民社会論の構想』山田秀雄編、新評論、1991
- ・ 高島善哉『高島善哉著作集 第二巻 経済社会学の基本問題』こぶし書房、1998
- ・ C.H.クーリー『現代社会学大系 第4巻 社会組織論』大橋幸・菊池美代志訳、青木書店、1970
- ・ トマス・ホップズ『リヴァイアサン(1)』水田洋訳、岩波書店、1954
- ・ 中山徹『地域経済は再生できるか』新日本出版社、1999
- ・ ハーバート・スペンサー『第一原理(上)(下)』澤田謙訳、而立社、1923
- ・ 平田清明『平田清明 市民社会を生きる』晃洋書房、2007
- ・ 平田清明『経済学と歴史認識』岩波書店、1971
- ・ F・テンニース『欧州社会問題の発展』中外文化協会、1925
- ・ F・テンニース『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)(下)』杉之原寿一訳、岩波書店、1957
- ・ F・エンゲルス『フォイエルバッハ論』藤川覚訳、大月書店、1972
- ・ F・エンゲルス『猿が人間になるについての労働の役割』大月書店編集部訳、大月書店、1965
- ・ F・エンゲルス『空想より科学へ』大内兵衛訳、岩波書店、1946
- ・ F・エンゲルス『反デューリング論(1)』村田陽一訳、大月書店、1955
- ・ F・エンゲルス『自然の弁証法 上巻』田辺振太郎訳、岩波書店、1973
- ・ F・エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』戸原四郎、岩波書店、1965
- ・ F・ニーチェ『道徳の系譜』木場深定訳、岩波書店、1940
- ・ F・バッケンハイム『近代人の疎外』栗田賢三訳、岩波書店、1960
- ・ 細内信孝『コミュニティ・ビジネス』中央大学出版部、1999
- ・ 本間義人『地域再生の条件』岩波書店、2007
- ・ マックス・ヴェーバー『社会学の根本概念』清水幾太郎訳、岩波書店、1972
- ・ 宮本憲一『環境経済学 新版』岩波書店、2007
- ・ 宮本憲一『維持可能な社会に向かって 公害は終わっていない』岩波書店、2006
- ・ 山田喜志夫編著『経済学と現代社会』梓出版、1992
- ・ 吉田浩『フェルディナンド・テンニエス』東信堂、2003
- ・ 老川慶喜『日本経済史』税務経理協会、2002
- ・ 渡辺雅男『市民社会と福祉国家』昭和堂、2007

## <参考資料>

- ・ 平野栄一「学会の窓 テンニエス再考に向けて——思想史研究のフィールドワークより」『地域社会研究』都留文科大学地域社会学会/都留文科大学地域社会学会編集委員会編、第16号、2006年3月
- ・ 岩月岳史「地域コミュニティ再生への一視点——住民主導による地域経営の現状と課題」『立法と行政』参議議員事務局/参議院事務局企画調整室編、第290号、2009年2月
- ・ 鈴木富久「書評 吉田浩著『フェルディナンド・テンニエス』」『唯物論と現代』文理閣/関西唯物論研究会編、第35号、2005年5月
- ・ 廳 茂「思想史の中の〈市民社会〉——F・テンニエスにおける〈市民社会〉問題(特殊 学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト 多元的共生社会の構築——被災地の現場から)——(特集3 ふたたび市民社会を考える)」『社会学雑誌』、神戸大学社会学研究会、第23号、2006年
- ・ 鈴木裕範「地域コミュニティ「再生を担うのはだれか」女性・高齢者が主体の地域づくり」『経済理論』和歌山経済学会、第324号、2005年3月
- ・ 倉坂秀史「特集 コミュニティ・コモンズ・コミュニタリアニズム」『公共研究』21世紀型COEプログラム「持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点」公共研究センター、第5巻3号、2008年
- ・ 田屋勝雄「共有地の悲劇(後半) TAC制度とレジーム・シフト」『緑書房』、第46巻6号(通号578)、2009年5月
- ・ 山田晴義「共同型まちづくりと「コミュニティ事業」のあり方——地域衰退地域における再生まちづくりの計画手法(市民型社会形成と地域づくり)」『21世紀フォーラム』政策科学研究所、第88号、2003年3月
- ・ 三本松政之「都市におけるコミュニティの再生(特集21世紀 地域福祉の課題と展望)」『地域福祉研究 Studies of community welfare』日本生命済生会福祉事業部、第29号、2001年
- ・ 山内直人「コミュニティ活性化とソーシャル・キャピタル(特集 コミュニティと関係性の再構築)」『公衆衛生』医学書院、第70巻1号、2006年1月
- ・ 新川達郎「地域経済社会におけるNPOの役割と可能性——NPOとコミュニティビジネス(特集 地域経済の再生とコミュニティビジネスの展開——NPOへの期待と課題)」『地域政策研究』地方自治研究機構、第17号、2002年2月
- ・ 加藤恵正「基調講演 地域に根ざしたコミュニティ経済と都市再生(特集 地域コミュニティのビジネスモデル——住宅、企業、行政とNPOのコラボレーションによる地域活性化に向けて)——(コミュニティビジネスフォーラム「地域コミュニティのビジネ

スモデル」報告)』『マンスリーきんき』経済産業調査会近畿本部、391号、2002年4月

- ・ 木原勝彬「自治体再構築とコミュニティ再生——市民主権型自治体を目指して(特集 都市における地域コミュニティ) Local government restructuring and local community regeneration」『都市問題研究 Journal of municipal problems.』、第60巻5号、2008年5月
- ・ 細内信孝「地域を元気にするコミュニティ・ビジネス(特集 地域再生に挑む)」『りそな一れ』りそな総合研究所、第6巻9号、2008年9月
- ・ 小田切徳美「農山村地域再生のイメージ(特集 地域自立の条件を探る——新たな国土計画に向けて)——(自立のための地域の主体形成)」『農業と経済』昭和堂、第74巻5号、2008年5月
- ・ 田中義岳「市民自治コミュニティへの道のり——宝塚市民の小校区コミュニティの自律的發展」『コミュニティ政策』東進堂/コミュニティ政策学会編集委員会、通号1、2003年
- ・ 熊坂俊彦「地場産業による地域・コミュニティ再生の可能性——茨城県・笠間焼産地を事例として」『武蔵大学論集』武蔵大学経済学会、第53巻2号(通号264)、2005年12月
- ・ 中井孝一 他「特集 地域コミュニティの再生」『地域政策研究』地方自治研究機構、第44号、2008年9月

## 講評

奨学論文審査委員会委員長  
経済学部教授 有井 行夫

### 「最優秀賞」受賞論文

#### 相沢暁彦「資本主義社会におけるゲマインシャフトの理論的分析」

本論文は、テンニースのあまりにも有名な著書、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』から2つの社会類型、「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」を学び、この類型論によって、マルクスの資本主義概念を深め、もって、われわれの現代社会、すなわち、ゲゼルシャフトにおける「疎外」をとらえ、人類の未来の構想としてゲマインシャフト的要素の復権を提案する。

まことに壮大な構想であるが、問題意識はきわめて妥当である。「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」の類型論によってマルクスの資本主義社会の断面は正確にとらえられるのである。テンニースが、実は、このような意義のものであることを主張した論者を私は知らない。

ゲマインシャフトとは端的に「共同体」ないし「共同体性」である。他方、ゲゼルシャフトは「市民社会」ないし「市民社会性」である。人間そのものはもとより、人間社会とは、この共同体性と市民社会性の統一なのである。統一でありながら、どちらかのモメントに偏倚することによって時代の特性を表わしていると言ってよい。資本主義的生産（＝商品生産社会）に先行する諸時代は共同体的モメントが優越し、したがってゲマインシャフトであり、資本主義的生産においては、個人的モメントが優越し、したがってゲゼルシャフトであり、資本主義に後続する社会においては、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトのバランスのとれた統一が予測される。マルクスに親しんだ人ならば、ゲマインシャフト＝ゲゼルシャフト論にリンクして『経済学批判要綱』貨幣論の末尾、人類史の三段階論を想起するであろう。

しかし相沢の主張は、歴史ではない。資本主義を克服する未来社会に向かっている。そのばあい、ゲゼルシャフトは、なによりも疎外された社会である。他方、社会主義への道は、ゲマインシャフト性の復権として理念的にとらえられる。現下の日本において、自民党は新古典派たることを宣言し、民主党は再版ケインズ主義に同行しようともがいている。民主党は効率主義を競うのではなく、ワークシェアリングを主軸政策にして、ゆったりとしたライフスタイル論を提案すべきである。このように相沢のゲマインシャフト論は語っているようにみえる。相沢論文は、今後、どのように深めることも可能である。

経済学部 60 周年の懸賞論文募集が力作によって応えられたことを慶びたい。